論文要旨

人々はなぜ教会を離れるのか

ローマ・カトリック教会の場合

石塚亜実（経済学部 3 年）

指導教員：羽田功

この論文の目的は、カトリック教会での教会離れを通して、現代社会における宗教の在り方の一つの側面を探ることである。

第 1 章でローマ・カトリック教会の現状や問題についての導入を行う。その際、教会離れの現象が顕著になっている現教皇ベネディクト 16 世の下でのカトリック教会を切り口として問題を概観し、「ローマ・カトリック教会の保守性が教会離れの原因になっている」という仮説を立てる。

第 2 章では、以下の 6 つの問題を具体的に取り上げてカトリックの教義や制度、組織などと照らし合わせて問題の具体的な在り様を見ていき、仮説を検証する。トリエント・ミサの復活は、カトリック教会の保守化が明確に見て取れると同時に、ユダヤ教との関係を悪化させることにも繋がった。同性愛や人工妊娠中絶・避妊に関してはカトリックの教義で禁止されているが、それに固執する保守性が人々の要求とは乖離してしまっている。聖職者の性的虐待問題は、伝統的な独身制が原因の一つと言われており、制度面の問題も窺われる。また信者の模範となるべき聖職者が教義に反する行動をとっていたことや、教会が問題を隠蔽しようとしていたことが明らかになり、信者たちの不信感を強めることになった。教会の正統性に関する問題や他宗教との問題を見ると、カトリック教会の唯一性を主張し続ける保守的な姿勢が対外関係を大きく悪化させていることが分かる。

第 3 章では、2 章で行った 6 つの問題それぞれの分析を通して導き出されるカトリック教会の広義の保守性と教会離れの関連性をまとめ、保守性を教会離れの原因の一つとする仮説の妥当性を示した。

第 4 章では論文のまとめとして、3 章の内容を踏まえ、現代における宗教の在り方や宗教離れについて、ローマ・カトリック教会の事例の分析から考察を加える。ローマ・カトリック教会に限らず多くの宗教において宗教離れが構造的な問題として顕在化してきていることを指摘した。宗教が今後も人々の心を支える存在であり続けるためには、それぞれの宗教組織が、宗教の在り方が社会と乖離してしまっている現状をどこまで自覚できるか、周縁部の信者の声をどのくらい聞き、どう対応していくかが重要である。